

10年前に地元の寛仁親王牌で見せた姿から 今の諸橋愛を想像することはできなかつた



弥彦に初のG1・寛仁親王牌がやつてきたのは2011年。3月に東日本大震災があつた年だ。

トップ選手108人しか参加でききないG1。彼らが持つ肉体、自信、強くなりたいがための欲求が

混じり合つて、検車場の雰囲気は明るく華やかだけど、緊張感もしつかりある。

多数のファンが見にきてくれて、選手たちの気持ちも盛り上がつた初日。全レースが終わつたあと、検車場にある売店の前で、諸橋愛がぽつんとひとりで自転車を片づけていた。10レースを走つた彼は4着失格。帰りの支度をしている最中だつた。

こういう時、選手にかける言葉は難しい。ありきたりな「お疲れ様」と声をかけると、「来年出場できる新潟支部の枠は次の代になるだろうから、俺はもう苦しいです」とぼつり。ネガティブで、意外な返事に、こちらは返す言葉が見つからず、首だけを横に振つ

たけど、色白の彼の顔がいつもより白く見えた。

つて、この話、わずか10年前のことなんですよ。

現実は彼の言つた言葉通りにはならなかつた。というか真逆に。超負けず嫌いな諸橋の努力、周囲のサポートはもちろんのこと、震災の影響で、新潟県に避難してきた成田和也と弥彦競輪場で一緒に練習できるようになつた偶然もあつたりして、そのとき33歳だった彼の中で何かが覚醒した。6年後の2017年に地元記念を初めて獲つて、グランプリにも出場。今も彼は超一流の追い込み選手のひとり。

未来を変えちやつた。

▽弥彦競輪 寛仁親王牌

世界選手権記念トーナメント
思いつくまま回顧録 第5話
【新潟スポーツ 信氏 忠】

